

ふり遊びの文脈における怒るふりの理解の発達

溝 川 藍

問 題

1. ふり遊び状況における感情の見かけと本当の区別

人の感情表出が必ずしも内的な感情と一致しないことの理解は、社会的コンピテンスの重要な要素である (Saarni, 1999)。幼児期に入ると、幼稚園・保育所への入園に伴い、子どもの社会は飛躍的に広がり、他者との関係や状況に合わせた感情の調整とその理解は、子どもが集団や社会の中で適応的に生きていくための重要な問題として浮かび上がってくる (cf. 子安・田村・溝川, 2007)。社会的な文脈においては、感情の見かけと本当の区別能力は4歳から6歳の間に発達することが広く知られている (Gardner, Harris, Ohmoto, & Hamazaki, 1988; Gross & Harris, 1988; Harris, Donnelly, Guz, & Pitt-Watson, 1986; Josephs, 1994)。また同じ4歳から6歳の間に、視点取得の能力 (Piaget & Inhelder, 1956) や心の理論 (Wimmer & Perner, 1983) が飛躍的に発達する。認知発達との関連を調べた研究はまだ少ないものの、近年の研究においては、見かけの感情と本当の感情を区別する能力が、心の理論の発達に支えられて発達することも示唆されている (Banerjee & Yuill, 1999)。社会的な文脈における見かけの感情表出が幼児期に理解されるようになる証拠を最初に示したのは、Paul Harris とその共同研究者であった (Harris, et al., 1986)。Harris ら (1986) の第二実験では以下のような物語を用いて、4歳児と6歳児の見かけの感情の理解について検討した。

ダイアナのお兄さんがダイアナをからかっています。ダイアナは、お兄さんが自分の感じていることを知ったら、からかい続けることを知っています。それで、ダイアナは、自分の感じていることを隠そうとします。

この物語の提示後、主人公の内的な感情と表出する感情について質問を行うと、4歳児の多くは「主人公は悲しみを感じており、悲しい顔を見せる」と判断し、6歳児は「主人公は悲しみを感じているが、内的な感情よりもポジティブな感情を表出する」と判断した。その後の一連の研究から、児童期にも見かけの感情表出の動機に関する理解が進むことが示されているものの (Gnepp & Hess, 1986; Zeman & Garber, 1996)、おおむね4歳から6歳の間に、社会的な文脈における感情の見かけと本当の区別が可能になることが、発達の共通の認識とされている。感情の見かけと本当の区別に関しては、日本・アメリカ・イギリスの間で理解が可能になる年齢に差がないことも分かっている (Gardner, et al., 1994)。

社会的な文脈において見かけの感情と本当の感情を区別する能力が、幼児期の4歳から6歳の間に発達するという証拠は、これまでに多く示されてきたが、4歳児は「全ての見かけの表出が内的な感情と一致する」と考えているわけではないようである。実際には、子どもは4歳時点においても見かけの感情と本当の感情を区別するための基本的な能力は持っている(Banerjee, 1997; Mizokawa, 2009; under revision)。4歳児が感情の見かけと本当を区別していることの証拠の1つは、ふり遊びの文脈において認められる。幼児は、ふり遊びの中では、他の文脈においてよりも、高い認知能力を発揮する(cf. Lillard, 1993; Vygotsky, 1930/1978)。例えば、だましの物体(e.g. 岩のように見えるスポンジ)の見かけと本当の区別が難しいとされる3歳児でも、ふり(pretend)という言葉を用いて尋ねると、その物体の見かけと本当を区別することが可能である(Flavell, Flavell, & Green, 1987)。近年、物体の見かけと本当だけでなく、感情の見かけと本当に関しても、ふり遊びの文脈の中に位置づけられた表出に関しては6歳以前から理解が可能であるとの証拠が新たに示されている(Mizokawa, 2009; under revision)。Mizokawa (under revision) は、幼児を対象に、主人公が「泣くふり」遊びをしている以下のような場面を提示し、「本当に泣いているように見えるか」、「本当に泣いているか」、「主人公の内的な感情」について尋ねた。

アキトくんとお友だちは、テレビで泣いている赤ちゃんを見ました。2人は泣いている赤ちゃんのように泣くふりをしようと思いました。お友だちは楽しそうに「今から泣いているふりをするよ」と言って手を顔に当てました。アキトくんも楽しそうに「ぼくも泣いているふりをするよ」と言いました。アキトくんは手をお顔に当てて、まるで泣いているように見えます。

Mizokawa (2009; under revision) の研究から、見かけの感情と本当の感情の区別が難しいとされる6歳以前の子どもでも、「泣いているように見えても本当の泣きではない」と判断することが示された。このように、ふり遊びの文脈においては、子どもは早期に泣くふりと本当の泣きの区別の能力を発揮する。しかしながら、幼児における「泣き」以外の「感情のふり遊び」に関する理解については未だほとんど明らかになっていない。そこで本研究では、ふり遊びの文脈における見かけの怒りに着目した。自他の怒りは、子どもがその生活環境の中でしばしば出会う感情表現である。「本当の怒り」は、これから生じうる攻撃やトラブルのシグナルを伝達するものである。幼児は、ふり遊びというポジティブな文脈の中での「怒るふり」について、「本当の怒り」と区別して捉えているのだろうか。Mizokawa (2009; under revision) は「ふり遊び」という文脈が感情の見かけと本当を区別する能力を促進することを示唆している。この主張が正しければ、泣くふりの場合と同様に、6歳以前から「怒るふりは『怒っているように見えるが本当の怒りではない』ことを理解できることが予測される。

さらに、Mizokawa (under revision) は、3,4歳児でも、半数以上が泣くふりの行為者の「ふりの感情表出」を内的な悲しみ感情と切り離して捉えていることを示した。このことから「ふり遊び」での見かけの表出について本当の表出でないと判断できる子どもは、そのふりの表出を内的な感情とも切り離して認識していることが示唆される。怒るふりに関する知見はまだないものの、怒るふりを本当の怒りと区別できる子どもは、3,4歳児でも行為者の感情について

「怒っている気持ちではない」と判断できると予想される。この点についても検討を行う。

2. 「感情のふり」の共有

社会的文脈の中での偽りの感情表出は、受け手を誤った感情理解へと導き得る。例えば、ある人が友人の家で苦手な食べ物を振舞われたときに笑顔を見せた場合、その笑顔を見た友人は「相手に喜んでもらえている」と誤解するだろう。子どもが見かけの感情表出が齎し出す他者の誤った信念をいつ頃に理解するのかという問題については、これまでもいくつかの研究がされてきた。幼児に仮想場面の主人公が本当の感情を隠して見かけの感情を表出する物語を聞かせた後に、「課題中の他者は、見かけの感情を表出している主人公がどのような感情を抱いていると推測するか」について尋ねると、6歳児は4歳児よりも、他者が見かけの感情に欺かれて誤った信念を抱くことに関して理解を示すことが知られている (Gross & Harris, 1988; 溝川, 2007)。ただし、6歳児でも他者が誤信念を抱き得ることについて十分に理解しているわけではない。例えば主人公が嘘泣きをする場面においては、6歳児の大半が「主人公は泣いているように見えるが、実際には泣いておらず、課題中の他者も本当の泣きではないことを見破っている」と判断した (Mizokawa & Koyasu, 2007)。同じ場面において「他者が誤信念を抱く (本当の泣きだと思ひこむ)」と判断するようになる子どもの割合は小学1年生から4年生の間に増加し、4・5・6年生ではその大半が他者の誤信念を認識していた (溝川・子安, 2008)。これらの知見から、仮想場面の登場人物が感情を隠したがつていることを理解している子どもは、課題中の他者を誤った感情理解へと導こうとしていることにもある程度は気付いているようであるが、この理解は、幼児期の間だけでなく児童期にも発達していくものと考えられる。

これまでの見かけの感情の理解の発達を扱った研究のほとんどは、「他者が主人公の見かけの表出に騙され得る状況」を仮想場面として使用していた。つまり、4歳から6歳の間に見かけの感情の理解が発達することを示した研究は、他者の誤った信念が生じ得る状況での見かけの感情表出に関する理解を扱っていた。しかしながら、前項に記したように、ふり遊びの文脈においては、子どもは早期に泣くふりと本当の泣きの区別の能力を発揮する (Mizokawa, 2009; under revision)。Gross & Harris (1988)は、ふり遊びにおいては、ふりの表出の行為者もそれを見ている他者も、当該の見かけの表出は単なる「ふり」であることをよく理解しており、そのために、ふり遊びとしての見かけの表出は子どもにとってわかりやすいであろうことを指摘している。確かに見かけの感情の表出者と他者の二者がふり遊びの文脈を共有している場合、課題中の他者には誤った信念（ここでは、本当の怒りだと思ひこむこと）は生じないはずであり、そのことが見かけの感情の早期の理解に影響する可能性がある。本研究では、仮想場面として、Mizokawa (2009; under revision) と同様に、仮想場面の中の主人公（表出者）とその友人（他者）の2名がふり遊びを共有している場面を用いて、遊びとしての怒るふりが他者に及ぼす影響についても、3,4歳児が年長の子どもたちと同様の認識を示すか否かを検討した。

目 的

3歳から6歳児を対象に、ふり遊びの仮想状況における怒るふりの理解について検討を行い、以下の3つの仮説を検証することを目的とした。

仮説1. ふり遊び状況においては、3,4歳児は5,6歳児と同程度に、怒るふりと本当の怒りを区別する。仮説2. 怒るふりと本当の怒りを区別できている子どもと区別できない子どもの間で、ふり遊びの行為者の感情認識に違いがある。ふりと本当の区別が可能な子どもは、より「行為者は怒っていない」と判断する。仮説3. 怒るふりと本当の怒りを区別できている子どもと区別できない子どもの間で、ふり遊びの相手の信念の認識に違いがある。ふりと本当の区別が可能な子どもは、より「他者も『主人公は怒っていない』と思う」と判断する。

方 法

対象児

京都市内の私立A保育園に通う3,4歳児32名、5,6歳児33名が実験に参加した。全ての課題の仮想状況について理解していることが確認された子どものデータのみを分析に使用したため、最終的な分析対象となったのは、3,4歳児26名（平均月齢50.5ヶ月、 $SD=4.8$ ヶ月、範囲43~59ヶ月）、5,6歳児32名（平均月齢68.0ヶ月、 $SD=4.9$ ヶ月、範囲61~75ヶ月）であった。

材料と手続き

保育園の一室で個別に実験を実施した。PVT-R 絵画語彙発達検査（上野・名越・小貫, 2008）と怒り-ふり課題を用い、この順序で実施した。

(1) PVT-R 絵画語彙発達検査

絵画語彙発達検査を用いて、子どもの語彙能力を調べた。実験者は、マニュアルに従って検査を実施した。例えば、子どもに4つの絵を含んだ図版を見せ『くつ』はどれですか」と尋ね、4つの絵の中から1つを選択することを求めた。

(2) 怒り-ふり課題

怒り-ふり課題の実施前に、まず練習課題（動物のふり課題）を実施し、参加児全員が「ふり」や「まるで~のように」といった言葉を含む課題を理解し、適切に回答することが可能であることを確認した。

怒り-ふり課題は、見かけの表出課題（1題）と本当の表出課題（1題）から構成されていた。課題の手続きや教示のワーディングは、全て Mizokawa (under revision) の「泣くふり課題（ふり遊び条件）」に倣った。2種類の怒り-ふり課題は、登場人物と物語の最後の部分が異なっていたが、それ以外においては共通しており、どちらの課題においても主人公が友だちと怒るふり遊びをしている場面が提示された。課題には男子版と女子版があり、課題の登場人物を参加児の性別と一致させて使用した。課題の提示順序はカウンターバランスした。各課題で5枚の状況図を使用し、Microsoft PowerPointのスライドショーを用いて、それをノートパソコンの画面上に1枚ずつ提示しながら実験者がストーリーを読み聞かせる形で実施した。見かけの表出課題のストーリー（名前は男児版のもの）は以下の通りである。なお、見かけの表出課題の状況図は図1に示した。

1. マコトくんとお友だちは、テレビで怒っている人を見ました。

2. 2人は怒っている人のように怒るふりをしようと思っています。
3. お友だちは楽しそうに「今から怒っているふりをするよ」と言って、手を腰に当てました。
4. マコトくんも楽しそうに「ぼくも怒っているふりをするよ」と言いました。
5. マコトくんは、手を腰に当てて、まるで怒っているようにみえます。

本当の表出課題の物語の最後の部分は以下の通りであった。（1～3は上記と共通）

4. そのとき、お友だちのひじがヨウタくんの体にドンとぶつかりました。
5. ヨウタくんは、とても痛かったのでプンプン怒りはじめました。

各課題の提示後に、主人公の見かけと本当についての質問（見かけと本当質問3問：見かけ・本当・理由）と主人公の内的感情についての質問（感情質問1問）、及び主人公の感情に関する課題中の他者の信念についての質問（他者信念質問1問）を行なった。各質問における選択肢の順序はカウンターバランスした。

見かけと本当質問：

- (a) 見かけ. [主人公の名前] は怒っているように見えるかな、怒っているように見えないかな。
- (b) 本当. [主人公の名前] は本当に怒っているのかな、それとも本当は怒っていないのかな。
- (c) 理由. [主人公の名前] はどうしてこんな風になっているのかな。怒っている人を見て怒っているふりをしようと思ったからかな、それとも何か嫌なことがあったからかな。

感情質問：

- (d) 感情. [主人公の名前] は怒っている気持ちかな。それとも怒っている気持ちではないと思うかな。

他者信念質問：

- (e) 他者信念. お友だちは[主人公の名前] が本当に怒っていると思うかな。それとも本当は怒っていないと思うかな。

2名の登場人物がふり遊びの状況を共有していることについて、参加児が理解していたかどうかを確認するため、各課題の最後に、「2名の登場人物がテレビで見た人物」及び「課題中の他者がふりをしていたか否か」についても質問を行なった（例. 2人はテレビで何を見たのかな。お友だちはさっき怒っているふりをしていたかな。それともふりはしていなくて本当に怒っていたかな）。確認質問に1問でも誤答した子どもは分析データから除外した。

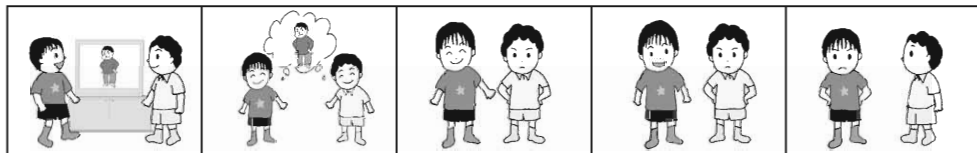


図1 見かけの表出課題の状況図（男児版）

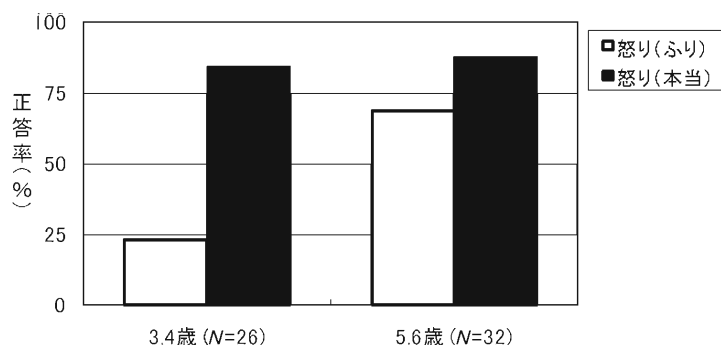


図2 年齢群ごとの各課題の正答率

結 果

1. 主人公の見かけの表出と本当の表出の区別

「見かけと本当質問」の3題全て (a, b, c) に適切に答えたときに正答と判定し、課題ごとに正答率を算出した。具体的には、見かけの表出課題では、「(a) 怒っているように見える, (b) 本当は怒っていない, (c) 怒っているふりをしようと思ったから」と回答した場合に、本当の表出課題では、「(a) 怒っているように見える, (b) 本当に怒っている, (c) 嫌なことがあったから」と回答した場合に正答とみなした。

見かけの表出課題、本当の表出課題における年齢群ごとの正答率は、図2に示した。見かけの表出課題において、適切な理由づけとともに「主人公は怒っているように見えるが、本当は怒っていない (見かけと本当質問・正答)」と判断した子どもの割合は、3, 4歳児群で23.1% (26名中6名), 5, 6歳児群で66.7% (33名中22名)であった。年齢群による「見かけと本当質問」の正答・誤答の偏りがあるか否かについて、Fisherの直接確率法を用いて検討したところ、有意な偏りがあり ($p < .01$), 5, 6歳児群の方が3, 4歳児群よりも有意に正答率が高いことが示された。

本当の表出課題においては、両年齢群で80%以上の正答率を示しており、Fisherの直接確率法の結果、年齢群による有意な差は認められなかった ($n.s.$)。

なお、見かけの表出課題の質問ごと(a, b, c)の正答率の基本データを以下に示した。(a) 見かけ質問の正答率は、3, 4歳児群で84.6%, 5, 6歳児群で96.9%であった。(b) 本当質問の正答率は、3, 4歳児群で38.5%, 5, 6歳児群で71.9%であった。(c) 理由質問の正答率は、3, 4歳児群で96.2%, 5, 6歳児群で96.9%であった。これらの正答率から、見かけと本当質問の誤答者のほとんどが (b) 本当質問で誤答していることが確認された。

2. 各年齢群における言語能力と月齢の影響

まず、3, 4歳児群と5, 6歳児群の言語能力の差について検討を行った。PVT 絵画語彙発達検査から得られた語彙得点について、1要因 (年齢群: 3, 4歳, 5, 6歳) の分散分析を行ったところ、2つの年齢群間には有意な言語得点の差があることが示された ($p < .01$)。

次に、各年齢群において、見かけの表出課題の「見かけと本当質問」の正答群と誤答群の間に月齢と言語能力の有意な差があるか否かを検討するために、年齢群ごとに、正答群と誤答群それぞれの月齢と語彙得点を算出した。3,4 歳児群の正答者 6 名の平均月齢は 51.3 ヶ月 ($SD=3.9$ ヶ月, 範囲 47~59 ヶ月), 平均語彙得点は 18.0 点 ($SD=7.7$ 点, 範囲 8~28 点) であり, 誤答者 20 名の平均月齢は 50.3 ヶ月 ($SD=5.1$ ヶ月, 範囲 43~59 ヶ月), 平均語彙得点は 14.4 点 ($SD=8.1$ 点, 範囲 3~26 点) であった。また 5,6 歳児群の正答者 22 名の平均月齢は 68.6 ヶ月 ($SD=4.5$ ヶ月, 範囲 61~75 ヶ月), 平均語彙得点は 28.1 点 ($SD=8.1$ 点, 範囲 11~42 点) であり, 誤答者 10 名の平均月齢は 66.7 ヶ月 ($SD=5.0$ ヶ月, 範囲 61~74 ヶ月), 平均語彙得点は 26.7 点 ($SD=6.5$ 点, 範囲 17~38 点) であった。各年齢群において、月齢についての 1 要因 (ふり理解: 正答, 誤答) 分散分析を行なった結果、いずれも「見かけと本当質問」の正答群と誤答群の間に有意な差は認められなかった。同様に、各年齢群において、語彙得点についての 1 要因 (ふり理解: 正答, 誤答) 分散分析を行なった結果、いずれも「見かけと本当質問」の正答群と誤答群の間に有意な差は認められなかった ($n.s.$)。

年齢群間では言語能力の差が認められたものの、年齢群内では、3,4 歳児群でも 5,6 歳児群でも月齢や言語能力の高い者がより怒るふりの理解を示すということとはなかった。

3. ふりの行為者の感情認識

見かけの表出課題において、見かけと本当質問 3 問全てに正解した子ども (正答群) と見かけと本当質問に 1 問でも誤答した子ども (誤答群) の間で、(d) 感情質問における主人公 (ふりの行為者) の感情判断 (怒っていない / 怒っている) の割合に差があるか否かを検討した。年齢群ごとの内訳は表 1 に示した。カイ二乗検定を用いて年齢群ごとに見かけと本当質問の正答群と誤答群での感情認識の違いについて検討を行なったところ、両年齢群において分布の差が有意であった (3,4 歳: $\chi^2 (2) = 5.38, p < .05$; 5,6 歳: $\chi^2 (2) = 10.17, p < .01$)。つまり、どちらの年齢群においても、正答群では主人公の内的な感情について「怒っていない」との判断が多く、誤答群では「怒っている」との判断が多かった。

本当の表出課題においては、両年齢群で 80% 以上の子どもが主人公の感情について「怒っている」と判断しており、Fisher の直接確率法の結果、年齢群による有意な差は認められなかった ($n.s.$)。なお、3,4 歳児の正答群と 5,6 歳児の正答群の間、及び 3,4 歳児の誤答群と 5,6 歳児の誤答群の間には、有意な判断の差は得られなかった。

表 1 見かけと本当質問の正答群/誤答群におけるふりの行為者の内的な感情に関する認識

	3,4 歳		5,6 歳	
	怒っていない ($N=11$)	怒っている ($N=15$)	怒っていない ($N=22$)	怒っている ($N=10$)
見かけと本当質問				
正答	5	1	19	3
誤答	6	14	3	7

表 2 見かけと本当質問の正答群/誤答群における主人公の表出に関する他者信念の認識

見かけと本当質問	3,4 歳		5,6 歳	
	他者は「怒っていない」と思う	他者は「怒っている」と思う	他者は「怒っていない」と思う	他者は「怒っている」と思う
	(N=12)	(N=14)	(N=22)	(N=10)
正答	5	1	19	3
誤答	7	13	3	7

4. 他者信念の理解

各年齢群において、見かけの表出課題の「見かけと本当質問」に正答した子どものうち、(e) 他者信念質問において「課題中の他者が、『主人公は本当に怒っていないと思う』」と回答した子どもの割合を算出し、分析を行った。年齢群ごとの内訳は表 2 に示した。カイ二乗検定を用いて両年齢群において見かけと本当質問の正答群と誤答群での他者信念の認識の違いについて検討を行なったところ、両年齢群で分布の差が有意であった (3,4 歳: $\chi^2(2) = 5.38, p < .05$; 5,6 歳: $\chi^2(2) = 10.17, p < .01$)。すなわち、どちらの年齢群においても、正答群ほど「他者は『主人公が怒っていない』と思う」と判断し、誤答群ほど「他者は『主人公が怒っている』と思う」と判断した。

本当の表出課題においては、両年齢群で 80%以上の子どもが主人公の感情について「怒っている」と判断しており、Fisher の直接確率法の結果、年齢群による有意な差は認められなかった (*n.s.*)。なお、3,4 歳児の正答群と 5,6 歳児の正答群の間、及び 3,4 歳児の誤答群と 5,6 歳児の誤答群の間には、有意な判断の差は得られなかった。

考 察

本研究では、「ふり遊びの仮想状況における怒るふりの理解の発達」について検討を行い、幼児の見かけの感情に関する初期の理解の様相を探った。

1. ふり遊びの文脈における見かけの表出と本当の表出の区別

ふり遊びとしての怒るふりが本当の怒りとは異なることの理解には年齢差があり、5,6 歳児は 3,4 歳児よりも怒るふりの見かけと本当を区別していた。つまり、3,4 歳児には、怒るふりを本当の怒りであると捉えている子どもがより多く存在した。この結果は、仮説 1 [ふり遊び状況においては、3,4 歳児は 5,6 歳児と同程度に、怒るふりと本当の怒りを区別する] を支持しなかった。一方、本研究と同様の手続き・教示法を用いて「泣くふり」の理解に関して検討した先行研究においては、6 歳以前から泣くふりについて理解できることを示していた (Mizokawa, 2009; under revision)。

「怒るふり」に関する本研究の結果と「泣くふり」に関する先行研究の知見の相違には、幼児が個人の来歴の中で経験してきた「感情」の質の差が影響している可能性が考えられる。つまり、子どもが 3,4 歳になるまでに他者から向けられてきた「怒り」もしくはそれに準ずる感

情は、それほど生々しいものではなく、むしろ「ふり」のような形を表現形態によって伝えられることが多かったのではないだろうか。またそのような怒りの表出に先がけては、例えば「もう、そんなことをしたら怒るよ」などといった宣言がなされることも多いだろう。本研究で用いた課題の中でも、主人公は「今から怒るふりをするよ」と事前に表出を宣言していた。このふりの意図の提示は、3,4 歳児のふりと本当の区別を促進せず、むしろ「怒るふり」を「本当の怒り」と捉えるという結果へと結びついた可能性も考えられる。一方、泣きに関しては、子どもは3,4 歳までの間にも、泣き声や涙を伴う情動的に生々しい形態の泣きを多く目にする。本研究の実験に参加した幼児は0 歳児から6 歳児までが所属する保育園に通う子どもたちであった。彼らは日々の多くの時間を他の子どもたちと過ごしているが、このような社会生活の場で子どもは他者の泣きを度々目にしてきたことだろう。その意味で「怒るふり」は、「泣くふり」と比べて、本当の感情表出との区別が難しかったものと考えられる。先行研究からは「泣くふり」と「本当の泣き」を区別できるとされていた3,4 歳児が、「怒るふり」と「本当の怒り」を区別できないという本研究の結果は、見かけと本当の区別は認知的な発達だけでなく社会的文脈の中で培われている情動的なコミュニケーションによっても支えられている可能性を示唆するものであると考える。

2. 怒るふりの行為者の感情と怒るふりが導く他者信念の理解（正答群・誤答群別の分析）

怒るふりの見かけと本当を区別できていた子どもは、年齢群に関わらず、主人公の内的な感情についてより「怒っていない」と判断した。さらに、怒るふりの見かけと本当を区別できていた子どもは、年齢群に関わらず「課題中の他者が、『主人公は本当に怒っていない』と思う」と判断した。つまり、3,4 歳児でも「(本当の怒りとは異なる) ふり遊びとしての怒るふり」を理解している子どもであれば、見かけと内的感情を切り離して捉えることができ、また他者も本当の怒りだとは思いつまないと認識することが可能であった。これらの結果は、仮説2 [怒るふりと本当の怒りを区別できている子どもと区別できない子どもの間で、ふり遊びの行為者の感情認識に違いがある。ふりと本当の区別が可能な子どもは、より「行為者は怒っていない」と判断する] と仮説3 [怒るふりと本当の怒りを区別できている子どもと区別できない子どもの間で、ふり遊びの相手の信念の認識に違いがある。ふりと本当の区別が可能な子どもは、より「他者も『主人公は怒っていない』と思う」と判断する] を支持するものであった。ただし、そもそも「見かけと本当質問」に通過した3,4 歳児の人数が少なかったため、実験参加者の母数を増やしても結果が変わらないかどうかを確認しておく必要がある。

3. 今後の展望

感情を偽ることに関する理解の研究は1980 年頃から多く蓄積されているものの (e.g. Harris, et al., 1986), ふり遊びにおける感情を模したジェスチャーに関する認識の発達については、これまでほとんど未検討であった。「怒るふり」の表出に関して初めて幼児に問うた本研究の試みは、「ふり」の理解や「感情理解」の発達の様相を明らかにするだけでなく、しつけの文脈での「感情のふりの使用」の有効性を探る研究への展開とつながることが期待される。

本研究や Mizokawa (under revision) で扱われたのは、子どもである主人公が表出する「感

情のふり」の場面であった。大人の養育者が主にしつけにおいて子どもに「怒っている」「悲しんでいる」ことを伝える際には、メッセージを明確に伝えるために、わざとらしい形だけの怒りや泣きをかなり意図的・恣意的に使用することが多い。そのような意味で、子ども達が、大人の表出する「怒るふり・泣くふり」をどのように認識しているかを押さえておくことも今後の重要な課題となるだろう。本研究や Mizokawa (2009; under revision) から得た、子どもが表出する感情のふりの認識に関する知見を、そのまま大人の感情のふりに関する認識に関する知見として適用することには慎重でありたいが、仮にこれらの研究の知見をもとに考察を行うとすると、幼児は、日常生活における大人の表出する感情のふりに関して、以下のように認識している可能性がある。3,4 歳児は遊びとしての怒るふりに関しても「本当の怒り」と判断していた。この結果からは、しつけの場面で親が子どもに対して怒るふりをした場合には、幼い子どもはそれを本当の怒りだと受け取ることが多いと考えられる。一方で、6 歳以前の子どもでも、その多くが泣くふりについて「本当は泣いていない」と判断したという Mizokawa (2009; under revision) の結果から、親が子どもに対して泣くふりをして見せた場合は、幼い子どもでも、それが嘘の表出であることを見破ることができるものと予想される。もちろん、これらを厳密に検討するためには、ふりの表出の見かけの本当らしさ（どの程度本当に怒って泣いているように見えるか）の要因の影響やふりが表出される文脈についても考えなくてはならない。

たとえ子どもが、大人の表出を嘘の表出であると見破っていたとしても、大人の嘘泣きを通して「今あなたが行った行為は悪いことだ」などのメッセージを受け取ることはあるだろう。上述したように、子どもが感情のふりを目撃する文脈が、その場の子どものふりの理解に大きな影響を及ぼすことはよく考慮しておかねばならない。親がしつけとして「怒るふり」「泣くふり」を用いるのは、たいてい子ども自身が何らかの望ましくない行いをしたときである。子ども自身がそのような望ましくない行いをした場面とそうでない場面など、様々な場面において、「感情のふり」の真偽はどのように判断されるのか、感情のふりを通して表出者のメッセージがどのように伝わるのか等に関して、今後詳細に探っていく必要がある。

さらに、忘れてはならないのは、子どもが1人1人異なる多様な環境要因の中で育っている事実である。幼児期までに子どもが経験する自他の感情にまつわる出来事も幅広く一様ではない。感情のふりの認識が個人内でどのように発達していくのかについても、心の理論や言語発達などの他の指標との関連も含めて縦断的に調べていくことが重要であると考えられる。

謝 辞

調査にご協力いただきました A 保育園の先生方と園児の皆さんに心より御礼申し上げます。また、本論文の作成にあたりご指導いただきました京都大学大学院教育学研究科の子安増生先生に深く感謝申し上げます。

文 献

- Banerjee, M. (1997). Hidden emotions: Preschoolers' knowledge of appearance-reality and emotion display rules. *Social Cognition*, 15, 107-132.
- Banerjee, R., & Yuill, N. (1999b). Children's understanding of self-presentational display rules: Associations with mental-state understanding. *British Journal of Developmental Psychology*, 17, 111-124.
- Flavell, J. H., Flavell, E. R., & Green, F. L. (1987). Young children's knowledge about the apparent-real and pretend-real distinctions. *Developmental Psychology*, 23, 816-822.
- Gardner, D., Harris, P. L., Ohmoto, M., & Hamazaki, T. (1988). Japanese children's understanding of the distinction between real and apparent emotion. *Child Development*, 11, 203-218.
- Gnepp, J., & Hess, D. L. R. (1986). Children's understanding of verbal and facial display rules. *Developmental Psychology*, 22, 103-108.
- Gross, D., & Harris, P. L. (1988). False beliefs about emotion: Children's understanding of misleading emotional displays. *International Journal of Behavioral Development*, 11, 475-488.
- Harris, P. L., Donnelly, K., Guz, G. R., & Pitt-Watson, R. (1986). Children's understanding of the distinction between real and apparent emotion. *Child Development*, 57, 895-909.
- Josephs, I. E. (1994). Display rule behavior and understanding in preschool children. *Journal of Nonverbal Behavior*, 18, 301-326.
- 子安増生・田村綾菜・溝川 藍 (2007). 感情の成長. 藤田和生 (編) 感情科学 (pp.143-171). 京都大学学術出版会.
- Lillard, A.S. (1993). Pretend play skills and the child's theory of mind. *Child Development*, 64, 348-371.
- 溝川 藍 (2007). 幼児期における他者の偽りの悲しみ表出の理解. *発達心理学研究*, 18, 174-184.
- Mizokawa, A., & Koyasu, M. (2007). Young children's understanding of another's apparent crying. *Psychologia*, 50, 291-307.
- 溝川 藍・子安増生 (2008). 児童期における見かけの泣きの理解の発達：二次的誤信念の理解との関連の検討. *発達心理学研究*, 19, 209-220.
- Mizokawa, A. (2009). Preschooler's understanding of apparent crying in a pretend play context. Poster presented at the XIV European Conference on Developmental Psychology, Vilnius, Lithuania.

- Mizokawa, A. (under revision). Young children's understanding of pretend crying: The effect of context.
- Piaget, J., & Inhelder, B. (1956). *The child's conception of space*. London: Routledge & Regan Paul.
- Saarni, C. (1979). Children's understanding of display rules for expressive behavior. *Developmental Psychology*, 15, 424-429.
- Saarni, C. (1999). *Developing emotional competence*. New York: Guilford.
- 上野一彦・名越斉子・小貫悟 (2008). PVT-R 絵画語彙発達検査. 日本文化科学社.
- Vygotsky, L.S. (1978). *Mind and society: The development of higher mental processes*. Cambridge, MA: Harvard University Press. (Original work published 1930).
- Wimmer, H. & Perner, J. (1983). Beliefs about beliefs: Representation and constraining function of wrong beliefs in young children's understanding of deception. *Cognition*, 13, 103-128.
- Zeman, J., & Garber, J. (1996). Display rules for anger, sadness, and pain: It depends on who is watching. *Child Development*, 67, 957-973.

(日本学術振興会特別研究員 教育認知心理学講座 博士後期課程 2 回生)

(受稿2009年9月7日、改稿2009年11月30日、受理2009年12月11日)

Young Children's Understanding of Apparent Angry Expression in a Pretend Play Context

MIZOKAWAAi

This study investigated how young children understand apparent angry expression. Twenty-six younger children (43-59 months, $M = 51$ months) and 32 older children (61-75 months, $M = 68$ months) were read stories in which a protagonist was really or apparently angry in a pretend play context and asked about these events. The result showed that only older children could distinguish protagonists' appearance and reality. However, some younger children who could distinguish the appearance and reality judged that the protagonist did not feel angry and that another character inferred that the protagonist did not actually angry, as older children did. These findings suggested young children's limited understanding of apparent angry expression.